

IS リサーチメソッド研究部会

飯沼守彦 (いいぬま もりひこ)

日本大学

小川美香子 (おがわ みかこ)

東京海洋大学

柴 直樹 (しば なおき)

日本大学

田名部元成 (たなぶ もとなり)

横浜国立大学

百海正一 (ひやつかい しょういち)

元中央大学ビジネススクール

松下倫子 (まつした みちこ)

関東学院大学

I. IS リサーチメソッド研究部会の近況

本誌 2020 年 12 月号 (Vol. 29, No. 3) にて、本研究部会の活動紹介を掲載していただいてから 2 年あまりが経過した。この 2 年間、コロナ禍の中で当部会は以前のような毎月の定例会開催を見合わせてきたが、年 2 回のオンラインによる会合を開いて部会活動を継続してきた。まん延防止等重点措置が解除された後、昨年度後半より、従来の対面形式での会合を再開しつつある。そこでは、各メンバーが IS リサーチメソッド (研究方法) に関する話題を持ち寄り、情報交換を行なっている。本号では、定例メンバーにここ最近の議論を踏まえた IS リサーチメソッドに関連する記事を寄稿していただいた。取り上げられたトピックは、メンバーの方法論的多様性を反映し多岐に渡る。まず、IS の国際会議発表に見られる IS 研究方法の動向や、リサーチメソッド研究の傾向について紹介した後、批判的实在論、質的研究方法とその実践、ケースメソッド等、諸研究方法について論ずる。

(部会幹事：柴 直樹)

II. 国際会議における質的研究および方法論研究の動向

前回の研究部会報告 [1] では、Association for

Information Systems (AIS) 主催の国際会議 The annual International Conference on Information Systems (ICIS) の予稿集から、2011 年から 2019 年の 9 年間について質的研究の動向を調べた。今回は対象を 2022 年まで広げた (表 1)。

近年、ICIS 発表件数は順調に増加してきていたが、コロナの影響は避けられず、2020 年 (India, 完全リモート開催) の発表件数は前年 (Munich, Germany) と比較して 25% も落ち込んだ。それでも、図 1 から明らかのように、質的研究法を適用した研究は毎年 100 件以上、混合研究法を適用した研究もコンスタントに 100 件前後ある。発表総

表 1 ICIS 発表論文の qualitative method (QM) および mixed method (MM) での検索結果と research methods (RM) セッション発表件数

	総数	QM	MM	QM%	MM%	RM件数
2011年	291	108	82	37.1%	28.2%	10
2012年	191	121	79	63.4%	41.4%	12
2013年	214	150	97	70.1%	45.3%	12
2014年	315	124	82	39.4%	26.0%	9
2015年	342	139	109	40.6%	31.9%	8
2016年	368	154	121	41.8%	32.9%	12
2017年	401	156	101	38.9%	25.2%	13
2018年	451	152	123	33.7%	27.3%	4
2019年	431	173	125	40.1%	29.0%	12
2020年	326	125	91	38.3%	27.9%	10
2021年	375	162	112	43.2%	29.9%	12
2022年	329	140	92	42.6%	28.0%	11

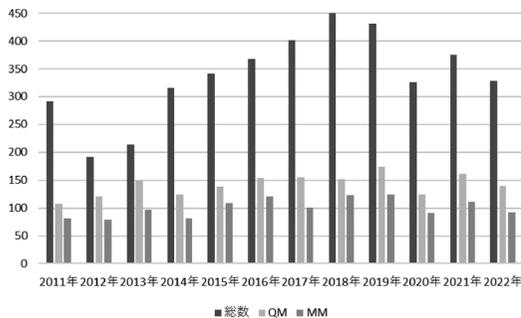


図1 ICIS 発表における質的研究法と混合研究法の件数推移

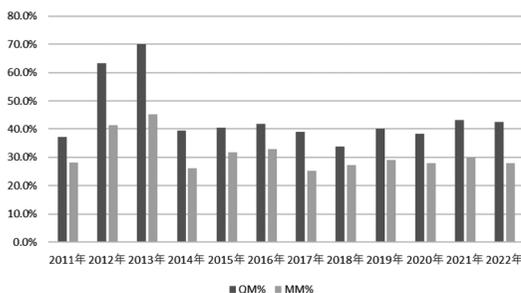


図2 ICIS 発表における質的研究法と混合研究法の割合推移

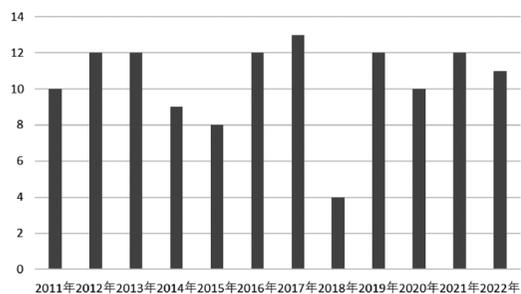


図3 ICIS 発表における研究方法論の件数推移

数に対する質的研究法の割合を調べると、2012年(63.4%)から2013年(70.1%)のブームの後も40%前後の研究で採用されており、AISの研究者に定着していることがわかる(図2)。混合研究法も2012年と2013年では40%を超えているが、他の年でも30%近い研究で採用されている(図2)。

ICISでは毎年、研究方法論のセッション¹⁾も組まれており、2018年を除き、毎年10件前後の研究が発表されている(図3)。この傾向は発表件数が

激減した2020年も同様で、国際会議では研究方法論への関心が高いといえよう。

注

- 1) セッションタイトルはADVANCES IN RESEARCH METHODS または ADVANCES IN THEORIES, METHODS AND PHILOSOPHY.

参考文献

- [1] 飯沼守彦ほか、「研究部会活動紹介 IS リサーチメソッド研究部会」、『経営情報学会誌』第29巻、3号、2020年12月号、226-232ページ。
- [2] AIS eLibrary ICIS2020 検索ページ, <https://aisel.aisnet.org/icis2020/> (2022年12月21日閲覧)
- [3] AIS eLibrary ICIS2021 検索ページ, <https://aisel.aisnet.org/icis2021/> (2022年12月21日閲覧)
- [4] AIS eLibrary ICIS2022 検索ページ, <https://aisel.aisnet.org/icis2022/> (2022年12月21日閲覧)

(松下倫子)

III. ICIS2022に見るISリサーチメソッド研究の動向

2022年12月11日～14日にデンマークの首都コペンハーゲンで開催されたICIS (International Conference of Information Systems) 2022に参加した。2020年と2021年の2回にわたりオンライン開催をやむなしとしてきたICISであったが(ただし、2021年はハイブリッド開催)、今回は、3年ぶりに全対面形式により開催された。開催者の発表によれば、投稿論文数1243本(うち Completed research paperは54%)、採択された論文は328本で採択率は26%であった。

ISリサーチメソッドに関連すると思われる Advances in Methods, Theories, and Philosophy というトラック(以下ICISにおいて用いられた略称を用い「Theoryトラック」とする)が3本のセッションに分けて設けられていたので、これらすべてに参加した。この3本のセッションで報告された Completed research paper計7本の概要を紹介して、ISリサーチ研究の動向について考えたい。これら7本の論文は、AISの会員向け論文レポジトリ AIS eLibrary [1] より入手可能である。

1) Unveiling the Cloak: Kernel Theory Use in Design Science Research (by Frederik Möller et al.)

Design Scienceに理論 (Kernel Theory) がどのように使われているかを、2012～2022の主要なIS論文 (8つのトップジャーナルとICISを始めとする3つの国際会議) から選んだ47本の論文に基づき6つのパターンに類型化している。

2) Ratio and Intellectus: Towards a Conceptual Framework for Understanding Human and Artificial Intelligence (by Lena Hylving et al.)

15世紀のドイツの哲学者Nicolaus Cusanus (ニコラウス・クザーヌス) によるratio/intellectusという概念を引用し、人間とAIとの理解の概念枠組みにしようという試みである。

3) Page-Rewriting Digital Experiments—An Approach to Digital Field Experiments and a Demonstration in Carbon Offsetting (by Felix Dörpmund et al.)

“Digital Field Experiments” という研究方法を提案し、実際に使ってみたという研究である。各トラックから1本ずつノミネートされる優秀論文賞の候補として、Theoryトラックから選出された論文である (ただし、優秀論文賞の1位、2位の選には漏れたようだ)。

4) Dialectical Inquiry in Information Systems Research: A Synthesis of Principles (by Raffaele Fabio Ciriello et al.)

IS研究における「弁証法的研究 (Dialectical Inquiry)」に関する論文である。51のISジャーナルから、指定したキーワードで該当する論文を検索し63本を選び、命題の統合 (synthesis) の方法を6つに類型化している。

5) Material-Affective Assemblage Thinking in Researching Scalar Phenomena (by Shama Patel et al.)

社会物質性 (sociomateriality) の流れをくむ論文である。ドゥルーズ & ガタリ (Deleuze and Guattari) にルーツを持つ material-affective assemblage

thinkingの理論レンズを提案する。特に、George Floydの死亡が引き起こした大きな流れを読み解く。

6) Digital Mesh: On the Rise of Mesh Computing (by Gongtai Wang)

いたるところにネット接続されたデバイスが普及したことにより、“Digital Mesh” という新しい研究方法を提案するという論文である。IS研究のありようが、ISの効果的利用 (effective use) から発生的利用 (generative use) へ、ISデザインの研究が実体的アーキテクチャー (substantial architecture) からプロセス的アーキテクチャー (processual architecture) へと拡張されるべきという議論を展開している。

7) Habermasian discourse on digitalisation of governmental services—testing discourse ethical framework for communication (by Anne-Marie Tuikka et al.)

ドイツの哲学者・社会学者ハーバーマス (Habermas) の議論を引用した、政府のデジタル化に関連する倫理的側面の研究である。キーワードのCommunicative action, (Rational) discourseはハーバーマスの用語である。

これらを踏まえ、以下、Theoryトラックでの発表に関して所見を列挙する。

1) design scienceに焦点を当てた方法論研究があった。design scienceに関連する研究は、Theoryトラックにおける方法論研究のみならずここ10年に一定数の論文が受理されているようだ。

2) ドイツの隣国デンマークでの開催からドイツからの参加者が多かった (受理された論文の著者数ではドイツから267人で、第2位USAの189人を引き離してトップ) こともあり、ドイツ哲学をルーツに持つ (弁証法、クザーヌス、ハーバーマス) 概念的な論文が多く見られた。

3) Short paper (3セッションで合計4本) も含め定性的/定量的、混合研究法を方法論的に取り上げた論文は見られなかった (Call for Paperでのトラックの説明には、これらのトピックについて言及され

ている)。研究方法としてもうこれらはある程度定着したということかも知れない。

最後に、会議全体について特筆すべきこととして、3点あげる。

1) 難民支援にIS研究がどう貢献できるかというパネルセッション (Digitization to Support Generations of Refugees: How Can IS Research and Researchers Make a Difference?) があったので参加した。パレスチナの大学教員がチェアー(女性)で、パネリストの大半が女性、現地デンマークの難民支援NPOの代表者が、パネリストとして招かれた。そこで問われていた問は、「適切な理論・適切な研究方法をどう選択するか?」という方法論的なものであった。このセッションが主題としている喫緊の問題解決においても、方法論的問いが重要であることがわかる。

2) 最終日にはPaper-a-thonという企画の発表セッションに参加した。Paper-a-thonは2017年のICISから始まったイベントで、論文のハッカソン (paper hackathon)、つまり、数名のチームで数日間に集中的に論文を書き上げ、フィードバックを得ようという企画である。3チームの発表があった。その中に、本研究部会で以前より着目してきた定性的研究方法の1つであるGrounded Theory (GT) アプローチで著名なCorbin & Strauss [2] のopen codingに言及したものがあった。GTの方法は、このようなスピードが求められる調査にも利用可能であることがわかる。

3) 本稿で取り上げたTheoryトラックのみならず、すべてのトラックの発表の多くで、発表者によるプレゼンテーションビデオ (Completed research paperでは10~15分程度) が提供されており、AIS eLibrary [1] 上で視聴できる。つまり、2020年以降のオンライン開催で求められた録画動画によるプレゼンテーションが、今回の全対面形式での開催においても継続して提供されており、各発表の内容を手短かに知るのに利用できる。ただし、ビデオの提供は必須ではないようで、ビデオが提供されていない発表もある。Theoryトラックの上述の7本のCompleted research paperのうち、ビデオが提供されていたのは5本であった。

謝辞

本報告の一部はJSPS科研費21K01658の助成を受けたものである。

参考文献

- [1] Association of Information Systems, AIS eLibrary, <https://aisel.aisnet.org/> (2023年1月23日閲覧)
- [2] Strauss, A., and Corbin, J. M., *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. Sage Publications, Inc, 1990.

(柴 直樹)

IV. 批判的实在論が示唆する方法論的特徴

批判的实在論 (Critical Realism) は、Bhaskarによって提唱された科学哲学である (例えば [1])。本稿では、批判的实在論が示唆する方法論的特徴に関して推論形式、理論の重要性、GTA (Grounded Theory Approach) を含む質的研究との関係に限定して簡単に触れてみたい。

批判的实在論の主要な関心は、実際に起こっている諸事象の因果的諸力、発生メカニズムを探求することである。批判的实在論では実在が「経験のドメイン (empirical domain)」, 「アクチュアルなドメイン (actual domain)」, 「実在のドメイン (real domain)」によって構成されると考える [2]。これらは階層構造となっており、最も表面にあるのが経験のドメインで、実在のドメインが最も深層となる。

我々が研究を行うときに経験・観察できるのは経験のドメインで、アクチュアルなドメインと実在のドメインは直接、経験・観察できない。批判的实在論では、その関心対象である諸事象の因果的諸力や発生メカニズムは、直接経験・観察できない実在のドメインに存在するものと考えるので、経験・観察から推論することが求められる。このため、アブダクションとリトロダクションという推論形式を活用する。アブダクションは、再記述あるいは再文脈化とされ、既存の理論や解釈枠組みを活用して事象に対して新たな解釈 (推論) をしていくことであり、理論や解釈枠組みが正しいとしたときの事象に関する新たな解釈となる。これは「仮説の一形式」であり [2]、可能性の一つに過ぎない。アブダクシヨ

ンが良い知識をうみだす理由は以下の2つである ([2], p. 143).

- ・再記述は、研究対象となっている個別事例についてより深い知識を提供できる。
- ・理論をさらに新しい諸事例と関連付けることによって、一般的文脈や構造に関する理論を、徐々に検証し、修正し、基礎づけることもできる。

リトロダクションはアブダクションを補完する役割がある [3]。これは、アブダクションによって得られた事象に対する新たな解釈をもとに、それを生じさせているメカニズムを推定することである。この時の問いは「アブダクションで得たアイデアが成り立つとしたら、何が存在していなければならないか」であり、これを反復することになる [3]。

このように、批判的实在論では、アブダクションとリトロダクションをセットで行い、経験・観察された事象の発生メカニズムを推論していく。そのため、再記述・再文脈化に使用する理論の選択とアブダクションとリトロダクションを有効に行うために必要とされる情報をいかに経験のドメインから獲得するかがポイントとなる。後者は研究方法選択の問題と密接に関係する。この点に関して木下 ([4], p. 142) は以下のように述べている。

「実際の調査活動は経験ドメインによる当事者への調査から始まり、経験の理解、分析による再構成の作業になるから質的研究が適しており、それをもとにアクチュアル・ドメインで広範な調査を行う。これは社会調査（数量的研究）となるう。」

また、Karlsson (中澤訳) [5] は、事例研究に関する議論で、生成メカニズムへの着目と同時に文脈の体系だった利用を指摘しており、行動の持続的な観察によってのみ生成メカニズムの性質に関する認識が生じるとしている。この点に関して实在論者はエスノグラフィーが適していると主張している。

批判的实在論では、メカニズムの作動条件が異なれば、同じメカニズムが存在していても異なった現象が起きると考える。この想定のもとでは、メカニズムの推定と同時に、文脈の理解が必要不可欠である。社会システムにおける文脈は、さまざまな制度的な制約、その制約における個々人の関係性、個人と組織・社会との関係性など非常に複雑であり、暗黙知的な要素が多く含まれている。この暗黙知的な要素をある程度感じ取り理解するためには実際に研

究対象に介入することが有効であり、エスノグラフィーをはじめとする質的研究が重要なポジションを担っていると考えられる。

批判的实在論と質的研究に関する議論で、本研究部会として注目するのはGTA (Grounded Theory Approach) との関係である。Kempster & Parry [6] は、グラウンドデッド・セオリーによる組織研究が批判的实在論に導かれた場合の特徴として、文脈依存の研究、理論の活用、経験的データに対する根本的メカニズムの影響に関する認識の必要性等を指摘している。また、木下 [7] は、批判的实在論とM-GTAとの親和性について、批判的实在論の方法論部分を取り入れることができるのではないかとの指摘をしている。そのうえで、批判的实在論の特徴である存在論、システム観、推論方法、理論の方法論化等、9つの項目について、M-GTAとの関係を議論している。本研究部会においてもGTAを活用した質的研究を実践しており、今後は、GTAの有効活用と方法論的基盤を明らかにするために、批判的实在論との関係性について独自の検討を行っていく必要があると思われる。

参考文献

- [1] R. Bhaskar (式部信訳)『科学と实在論 超越的实在論と経験主義批判』法政大学出版局、2009年。
- [2] B. Danermark, M. Ekstrom, L. Jakobsen and J. Karlson (佐藤春吉監訳)『社会を説明する—批判的实在による社会科学論』ナカニシヤ出版、2015年。
- [3] 木下康仁「批判的实在論の発想と推論のダイナミズム」『看護研究』第55巻、第2号、2022年、145–152ページ。
- [4] 木下康仁「批判的实在論の基本モデル」『看護研究』第55巻、第2号、2022年、130–144ページ。
- [5] J. Karlsson (中澤平訳)「批判的实在論—その手法と研究デザイン」『立命館産業社会論集』第51巻、第4号、2016年、243–268ページ。
- [6] S. Kempster and K. W. Parry, “Grounded theory and leadership research: A critical realist perspective,” *The Leadership Quarterly*, Vol. 22, No. 1, 2011, pp. 106–120.
- [7] 木下康仁『定本 M-GTA—実践の理論化をめざす質的研究方法論—』医学書院、2020年。

(飯沼守彦)

V. 質的研究方法の相補的利用

本節では、筆者の学生に対する論文指導経験に基づいて、質的研究方法の相互補完的利用として、M-GTAとTEAの併用の可能性について述べる。Glaser and Strauss [1] によって開発された質的データの収集と分析のための方法であるGTA (Grounded Theory Approach) は、心理学や社会福祉はもとより、情報システム研究においても広く利用されるようになってきた。例えば、AIS (Association for Information Systems) の国際会議であるICIS (International Conference on Information Systems) では、研究方法としてGTAを採択した多くの研究報告を見ることができる。とりわけ、我が国のヒューマンサービス領域においては、木下 [3] [4] [5] [6] [8] が、GTAに方法論的な修正を加えて独自に発展させた修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Modified Grounded Theory Approach, M-GTA) が広く利用されるようになってきた。こうした流れを受けて、筆者も、[2] や [11] など、M-GTAを用いた質的研究の指導を数多く行ってきた。

M-GTAの特徴は、実践の理論化と理論の実践化という循環を重視する方法論であり、研究する人間の方法論化とデータ分析過程の明示化という2つの修正をオリジナルのGTAに加えたところにある[10]。M-GTAでは、データに基づく概念化において、他のGTAで典型的に用いられるデータのコーディングにおける切片化を行わず、代わりにデータ分析過程を明示化するための分析ワークシートを用いる。これは、説得力に優れた概念を生成でき、またそうした概念関係によって説得力のあるグラウンデッド・セオリーを提示 [7] するために、データに根ざす (grounded on data) という原則に基づいて、分析者自身の解釈作業を重視してデータから直接概念を生成しようとするM-GTAの思想に基づくものである。指導経験を通じて筆者は、M-GTAは、オリジナルのGTAと比較して学生に理解されやすいことを実感している。

サトウタツヤは、[10]において、経験を対象とする質的研究を、「構造」を扱うのが得意なのか、それとも「過程」を取り扱うのが得意なのかという次元と、実際に存在すること (実存性) を理解する

ことを重視しているのか、それとも現象の背後にある本質的なこと (理念性) を理解することを重視しているのかという次元の2軸をもって秩序づける試みを行っている。それによれば、GTAやM-GTAは、「構造×理念性」という象限 (法則定立的) に位置付けられている。筆者が、[2] のM-GTAに基づく研究に対する助言を行っていたとき、ある研究協力者に対する分析過程で、多岐にわたる過去経験を紐解く必要に迫られた。すなわち、M-GTAの分析をより深く行うために、研究協力者が、重要な過去経験をいかに経験づけて今に至っているのかを理解する必要が生じたのである。そのため、「構造×理念性」の対極にある「過程×実存性」(個性的記述) に位置付けられる複線経路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) の併用することにした。TEAは「異なる人生や発達の経路を歩みながらも類似の結果にたどり着くことを示す等至性 (Equifinality) の概念を、発達の・文化的事象に関する心理学研究に組み込んだヴァルシナー (Jaan Valsiner) の創案に基づいて開発された」[10] 質的研究法で、ベルタランフィのシステム論に依拠している [12]。新井 [2] は、TEAによる分析を通じて、研究協力者の経験の過程と実存性に対する理解を深めながら、M-GTAにおける概念化を着々と進めていくことができた。筆者は、この経験を通じて、複数の質的研究方法を併用することによる方法論的複眼 (トライアングレーション) の可能性を見出した。

境ほか [9] は、質的研究方法であるM-GTAとTEMを用いて、共通の手続きで収集した子どもの観察事例を、共通の研究課題のもとでそれぞれ分析し、各研究方法による経験の描かれ方を検討することを通じて「M-GTAが、個々の事例における事実の変遷や対象者の変容の要素を統合したプロセスの全体構造を捉える方法論であるのに対し、TEMは、実際の時間と共にある対象者の変容や事実の変遷のプロセスそのものを捉える方法論である」ことを見出している。そして、M-GTAとTEMという2つの研究方法を相補的に用いることで、現象理解をより深めることができる可能性をもつものと考えることが妥当であると指摘している。この指摘は、まさに筆者が指導経験を通じて獲得した確信に符合するものである。今後は、質的方法間の相補的利用に関

する方法論的議論を展開し、多種多様な様相を呈する情報システムという研究対象に対する理解を深めていきたい。

参考文献

- [1] Glaser, B. G. and Strauss, A. "The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research", Aldine, New York, 1967.
- [2] 新井啓矢「小規模小売店におけるQRコード決済の導入と継続的利用に関する意思決定過程一質的研究によるアプローチ」横浜国立大学大学院国際社会科学府経営学専攻修士論文, 2022年.
- [3] 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチ一質的実証研究の再生』弘文堂, 1999年.
- [4] 木下康仁『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践一質的研究への誘い』弘文堂, 2003年.
- [5] 木下康仁『分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ』弘文堂, 2005年.
- [6] 木下康仁『ライブ講義 M-GTA 実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて』弘文堂, 2007年.
- [7] 木下康仁「修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) の分析技法」『富山大学看護学会誌』第6巻, 第2号, 2007年, 1-10ページ.
- [8] 木下康仁『定本 M-GTA: 実践の理論化をめざす質的研究方法論』医学書院, 2020年.
- [9] 境愛一郎, 中西さやか, 中坪史典「子どもの経験を質的に描き出す試み: M-GTA と TEM の比較」『広島大学大学院教育学研究科紀要. 第三部, 教育人間科学関連領域』第61号, 2012年.
- [10] サトウタツヤ, 春日秀朗, 神崎真実 (編)『質的研究法マッピング: 特徴をつかみ, 活用するために』新曜社, 2020年.
- [11] 新野冬馬「有料座席列車が通勤者にもたらす意識の変化」横浜国立大学大学院国際社会科学府経営学専攻修士論文, 2019年.
- [12] 安田裕子, 滑田明暢, 福田茉莉, サトウタツヤ (編)『TEA 理論編: 複線径路等至性アプローチの基礎を学ぶ』新曜社, 2015年.

(田名部元成)

VI. M-GTA を用いた研究の実践と今後

本章では、筆者の経験および学生指導経験から、質的研究手法のひとつである修正版グラウンデ

ッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用いた研究の実践と今後について述べる。

M-GTA は、研究対象とする現象の構造やプロセスを明らかにする手法で、なかでも、ヒューマンサービス領域に適した手法とされる。M-GTA の分析手順は、予め質問を決めたインタビューガイドを作成し、事前に相手にメールで送付し、それに沿ってインタビューする。その際に、ある程度自由に話してもらい半構造化インタビューを行う。次に、録音したインタビュー内容をすべてテキスト化する。分析ワークシートに、テキスト化した文章から「具体例」を抽出し書き込み、段階的に抽象化したタイトルをつけるようなイメージで、「定義」化し「概念」名をつける。そして分析ワークシートから似た概念を組み合わせて「カテゴリ」を作成する。そして、研究目的やインタビュー内容に即して、カテゴリ名を用いて、分析対象の現象の経緯や実態を表す結果図とストーリーラインを作成し、現象の構造やプロセスを明らかにする¹⁾。

筆者が関与し、M-GTA を用いた研究成果で公開されたものとしては、長野ほか (2016)、山口ほか (2020)、Sugimura et al. (2019)、松本・小川 (2019) などがある。これらのうち、Sugimura et al. (2019) を除く研究は、食品安全管理分野の研究で、食品製造の現場や、飲食店でのサービスの現場を対象に、特定の取り組みの経緯や課題、あるいは、日々の業務の実態や課題を明らかにしたうえで、解決策を検討するといった内容の研究であった。Sugimura et al. (2019) については、経営情報学会の縁で結成したウェルビーイング工学研究会 (平野雅章氏, 妹尾大氏, 齋藤敦子氏, 杉村宏之氏, 大橋真人氏, 筆者) による研究成果の一部である。組織が従業員のウェルビーイングを高める簡便な方法として「よかったことリスト」の導入を提案した研究で、「よかったこと」の数の測定に加え、リストに記入されたテキストの分析に M-GTA を援用した。このほか未公開の研究として、筆者の指導学生達が、例えば下記のようなテーマで M-GTA を用いた研究を行ってきた。学生達の研究も、食品流通や食品安全管理分野で、現場の実態や課題を踏まえ、対策を提言した研究が多い。

- ・顧客価値が規定する外食チェーンにおける宅配事業のあり方—KFC の質的調査より

- ・気仙沼における生食メカジキの価値向上のための取り組み
- ・気仙沼における漁獲・陸揚げデータ提供システムの導入効果
- ・生協におけるフェアトレード紅茶の位置づけと今後
- ・飲食チェーンにおける店舗が自律自走出来る HACCP 導入—動機付けプロセスの状態遷移モデルを用いた A 社の事例分析—

これまで M-GTA 分析の研究対象とした現場では、実践や課題を踏まえて対策を検討し、さらにその対策を現場に還元し、また実践し、課題が出てきたら対策を検討する…という PDCA サイクルをまわしている。もともと、木下 (2007) で指摘された次の 2 点から、M-GTA が適する研究であるといえる。まず、ヒューマンサービス領域に代表されるように、人間の行動を伴い、現実の問題となっていることが判りやすく、その解決に、実践的に研究結果を戻すことが可能であるし、また期待もされている分野であること。次に、研究対象とする現象がプロセス的な特性をもっていることである。

研究対象者は自分達の実践を語り、その語りを、「実践の理論化と理論の実践化という循環を重視する方法論」(前章を参照) である M-GTA を用いて、部外者 (研究者、学生) が理論化する。理論化された結果図、ストーリーラインを見ることで、研究対象者達は、改めて自分達の実践を理解し、意味づけ、納得する。M-GTA は、こうした現場での実践で大変役立つ研究方法であり、研究成果を報告すると、研究対象とした企業の方々や、同業の方々からの納得性が高く、評価していただけることを実感している。

今後も M-GTA を用いて現場に役立つ研究をしていきたいと考える。筆者が関わってきた M-GTA 研究の限界は、人的、時間的な制約と関連するが、多くは 1 社、まれに 2~3 社を対象とした分析である点、分析者が 1~2 名である点である。今後の研究課題は、分析対象を増やし理論的飽和を目指すこと、できれば複数の研究者によるチーム研究として、複数の視点や解釈を反映した M-GTA 分析を実施することである。

さらに、これまでの研究では、研究期間の時間的制約から、なかなか次の循環までを観察、分析する

ことができていないため、一定期間を経て再調査するといった研究を行いたいと考えている。

また、質的調査だけでなく量的調査を加えたミックス法を取り入れ、一般化を目指すことも必要であるとと考えている。

謝辞

本報告の一部は JSPS 科研費 JP19K01831 の助成を受けたものである。

注

- 1) M-GTA および GTA については、前章の参考文献にある Glaser and Strauss (1967) や、木下康仁による複数の文献のほか、戈木クレイグ・ヒル・滋子による複数の文献を参考に研究を進めてきた。

参考文献

- [1] 長野知佳, 小川美香子, 濱田 (佐藤) 奈保子, 湯川剛一郎「二者監査における監査者と被監査者間のコミュニケーション—飲料製造 A 社の被監査者へのインタビューの質的調査分析—」『フードシステム研究』第 23 巻, 第 3 号, 2016 年, 197-202 ページ。
- [2] 松本隆志, 小川美香子「外食企業の外国人雇用実態と特定技能制度の導入に関する質的調査分析」『日本フードサービス学会年報』第 24 巻, 2019 年, 40-53 ページ。
- [3] 山口文子, 小川美香子, 濱田 (佐藤) 奈保子「中小食品製造業者における HACCP 導入の課題と対策」『フードシステム研究』第 26 巻, 第 4 号, 2020 年, 361-366 ページ。
- [4] Sugimura, H., Ohashi, M., Senoo, D., Ogawa, M., Hirano, M., and Saito, A., "List of Heartwarming Events: Developing an Alternative Approach to Measure and Analyse Well-being in the Social Context", *PACIS 2019 Proceedings*, 2019, 113. <https://aisel.aisnet.org/pacis2019/113>

(小川美香子)

VII. 質的研究とケースメソッド

経営情報学会の設立当初、経営情報学会の研究領域の研究、ついで経営情報学のカリキュラム・デザインは、名桜大学経営情報学科のコース・デザイン

と、拙著「ケースメソッド・ティーチング」[1] のコース・デザイン第9章に活かされている。また、経営情報システム評価の研究は、経営情報学会におけるグループ報告 [2] と、拙稿「第四世代評価—その背景と評価方法を中心に」を神奈川大学商経論叢 [3] と「ケースメソッドによる学習」[4] 第5章に活かされている。さらに、研究部会が探求してきた研究方法、質的研究方法のみならず、量的研究方法のうちデータ（1次データ）、公的ドキュメント（2次データ）などをミックスしたケース教材の作成は、Case「Nestle Japan—The Morning time with Nestle」WACRA（ワルシャワ経済大学）における報告（1995）と神奈川大学商経論叢第31巻第3号 [5] に活かされている。その後、成果は拙著「ケースメソッドによる学習」[4] の出版や、経営情報学会での報告（横浜国立大学）[6]、「ケース・ライティング・プロセス」（日本経営学会・日本大学商学部）や、経営情報学会研究部会（東北大学）で報告している。また、昨年2022年12月「ケースメソッド・ティーチング」[1] を出版した。今後、質的研究方法を基にした「ケース・ライティング」の執筆を予定している。このほか、本年度にはいり「ケースメソッド教授法の教科書」作成の打診がきている。

注

- 1) 質的研究の一つ、事例研究は19世紀初頭に法学（判例）、医学（現在のProblem Based Learning）、心理学の分野で確立している。また、ケースメソッド教授法（社会構成主義的な教育方法）は、3つの分野、①ケースメソッドによる学習（Learning from case studies）、②ケースメソッド・ティーチング、あるいはケース・ティーチング（Teaching with Cases）、③ケース・ライティング（Case Writing）から構成されている。

参考文献

- [1] 百海正一『ケースメソッド・ティーチング』学文社、2022年。
- [2] 百海正一「第4世代評価の方法」『経営情報学会情報システム評価（ISE）研究部会研究報告書』2001年、34-41ページ。
- [3] 百海正一「第四世代評価—その背景と評価手法を中心に」『商経論叢』第37巻、第3号、2002年。
- [4] 百海正一『ケースメソッドによる学習』学文社、2009年。
- [5] 百海正一「Nestle Japan—Morning Time with Nestle—」『商経論叢』第31巻、第3号、1996年。
- [6] 百海正一「ケース・ティーチング」『経営情報学会2007年度春季全国研究発表大会予稿集』、2007年。

（百海正一）